



# ロルワリン紀行

## Contents

ロルワリン・ヒマールの旅を終えて	小林 年	iii
ヒマラヤの氷河湖	山田 知充	iv
タンバ・コシ		1
ロルワリン・チュー		19
リピモ・シャール氷河		35
紀行		65
大井 幸雄	山口 斌	西 千里
矢作 榮一	今村 正克	岡田 幸子
坂野 茂晴	丹羽由紀夫	
協力者芳名録		84
隊員名簿・行動記録		85
編集後記		86

## ロルワリン・ヒマールの旅を終えて

### 小林 年

1992年の秋にヒムルン・ヒマールの登頂に成功した。その後、在札の山の会会員の間から、50歳以上で7000m級の山に気楽に行こうという計画が持ち上がった。最初に持ち上がったものは、プタ・ヒウンチュリであった。これは、ジュムラから、チイッヒーが「世界一美しい谷」と評したバルブン・コーラに入り、スキーを活用してプタ・ヒウンチュリを狙い、その後、ドルポ地方を通りム・ラを経て、ジョムソンに降りるというものであった。結局この計画は65日間という日数の長さにより実現不可能となった。

その後、所要日数が少なくすむ山を探し始めることになった。アンナプルナ内院、ランタン・ヒマール、ジュガール・ヒマールの山の探索となった。この中から、ジュガール・ヒマールのグルカルポ・リをランタン氷河の支氷河から登頂という計画が出来上がった。只、このグルカルポ・リの登攀ルートについての資料が乏しく、シュナイダーの1/50000の地図による登攀推定ルートでは、上部ルートの詳細は不明であった。このため、1995年10月、小林がカトマンドゥに飛び、ヘリコプターで上部ルートを偵察することになった。

現地に在住していた山口斌会員の交渉で、民間ヘリをチャーターで飛ぶことになり、当日空港で最後の打合せを行った所、民間のヘリでは上昇高度が足りず、キャンセルすることになった。その後、山口会員が軍のヘリを使用できるように交渉に入った。その間に、山田知充会員所有の写真から、グルカルポ・リの想定した登攀ルート上には懸垂氷河があり、登攀は非常に困難と予想され断念することになった。その後、札幌と協議の結果、ロルワリン・ヒマールのドゥランナ・リ（現地名タンナ・リ 6801m）を偵察することに切り換えることになった。11月4日、小林と山口の二

人が軍のヘリをチャーターし、タンナ・リの偵察を行った。その結果、難しくはあるが登頂可能なルートを見つけることが出来た。

1996年の秋、私たちタンナ・リ登山隊は日本を出発した。9月8日小林、柳澤の二人が、先発隊としてカトマンドゥ入りをした。本隊は9月15日にカトマンドゥに到着した。カトマンドゥにおける色々な仕事をかたづけ、9月20日バスにて出発し、ドラカに着いた。ここからがキャラバンの出発である。9月21日キャラバンを開始し、9月29日リピモ・シャル氷河の右岸に快適なベース・キャンプを設営した。

この年のネパールのモンスーンは、数十年来の激しい雨となっていた。特に7・8月がひどく、モンスーン明けも遅れていた。我々のキャラバン中にも時折雨に見舞われた。ロルワリン・チューの河沿いの道に入り、兩岸の5000m級の山々の白い新雪が目に入る頃になると希望と不安が入り混じった複雑な気持ちになった。9月30日より登山活動が開始されたが、B.C.より直ぐ氷河の上のルートという計画も、モレーンの山の連続となって活動が著しく阻害された。その上、度重なる降雪のため、新雪雪崩の危険もあり、我々の登山活動は中止することとなった。

私たちは今回未知のロルワリン・ヒマールのタンナ・リに向かったが、未知のルート、最悪の天候、隊員の技量等の色々な問題もあったが、それぞれ隊員はそれぞれに色々な収穫があったことと信じています。今回計画した数々の山々をこれからも沢山の会員が目指していただきたいものと思います。

今回の計画には沢山のの方々、特に登山事務局の方々のご支援をいただき大変ありがとうございました。隊員一同心から感謝しております。



リピ・モシャル氷河右岸からのタンナ・リ(左6,801m)とパパ(6,553m)



ベースキャンプと  
タンナ・リ (6,801m)



カルカ最上部 (5,150m) から見たタンナ・リ (6,801m)



夕陽に映えるタンナ・リ



夕陽に映えるタンナ・リ



C<sub>1</sub>とタンナ・リ  
左の稜線が登攀ル  
ートだった

## 隊員名簿および行動概要

### 登山隊

小林	年	64歳	隊長	AACH, JAC
山口	斌	58歳	医 療	AACH, JAC
丹羽	由紀夫	55歳	装 備	AACH, JAC
松田	彊	55歳	会計・食料	AACH
岩瀬	和 夫	31歳	輸 送	AACH
柳沢	盛 雄	29歳	渉外・食料	AACH
若尾	和 也	25歳	記 録	AACH
佐々木	新	22歳	記 録	AACH

#### 9月

- 8日 小林、柳沢出国。  
カトマンドゥで山口と合流
- 15日 丹羽、松田、岩瀬、若尾、佐々木、カトマンドゥへ
- 20日 カトマンドゥ発、車でドラカへ
- 21日 ドラカ→ピクティ
- 22日 ピクティ→シガティ
- 23日 シガティ→シムガオン
- 24日 シムガオン→ドンガン
- 25日 ドンガン→ベディン
- 26日 高度順化のためマンルン・ラへの道を迎える。4,500m まで往復
- 27日 ベディン→ナ・ガウン
- 28日 ナ・ガウン→オマイ・ツォー
- 29日 オマイ・ツォー→B. C.  
リピモ・シャル氷河右岸のアブリューションバレーのカルカ 4,980m
- 30日 C<sub>1</sub> へのルート工作および荷上

#### 10月

- 1日 C<sub>1</sub> へのルート工作および荷上
- 2日 昨夜の降雪のため停滞
- 3日 C<sub>1</sub> へのルート工作および荷上  
タンナ・リの支尾根上に仮 C<sub>1</sub> を設営
- 4日 上部氷河の雪原上に C<sub>1</sub> を設営(5,500m)
- 5日 C<sub>1</sub> → B. C.。昨夜からの降雪は 60cm の積雪をもたらした。B. C. へ撤退
- 6日 停滞。小林隊長体調悪くベディンまで下山
- 7日 停滞
- 8日 B. C. → C<sub>1</sub>  
小林隊長、山口医師とヘリコプターでカトマンドゥに移動
- 9日 C<sub>2</sub> へのルート工作

- 10日 C<sub>2</sub> へのルート工作
- 11日 C<sub>2</sub> 設立に向かうがピトン、スノバーが効かず、足元から発生する小雪崩に悩まされ 6,030m で撤退
- 12日 C<sub>1</sub> → B. C.
- 15日 B. C. → ナ・ガウン
- 16日 ナ・ガウン→ドンガン
- 17日 ドンガン→コンガル
- 18日 コンガル→シガティ
- 19日 シガティ→ラトマティー
- 20日 ラトマティー→ドラカ
- 21日 ドラカ→カトマンドゥ
- 30日 山口を除く全員帰国

### トレッキング隊

大井	幸 雄	60歳	隊長	AACH
佐藤	行 郎	68歳	医 療	AACH
矢作	栄 一	66歳		AACH
坂野	茂 晴	65歳	会 計	AACH
今村	正 克	58歳	医 療	AACH
八木橋	武	53歳		AACH
西	千 里			
井上	光 子			
岡田	幸 子			
内田	敏 子			

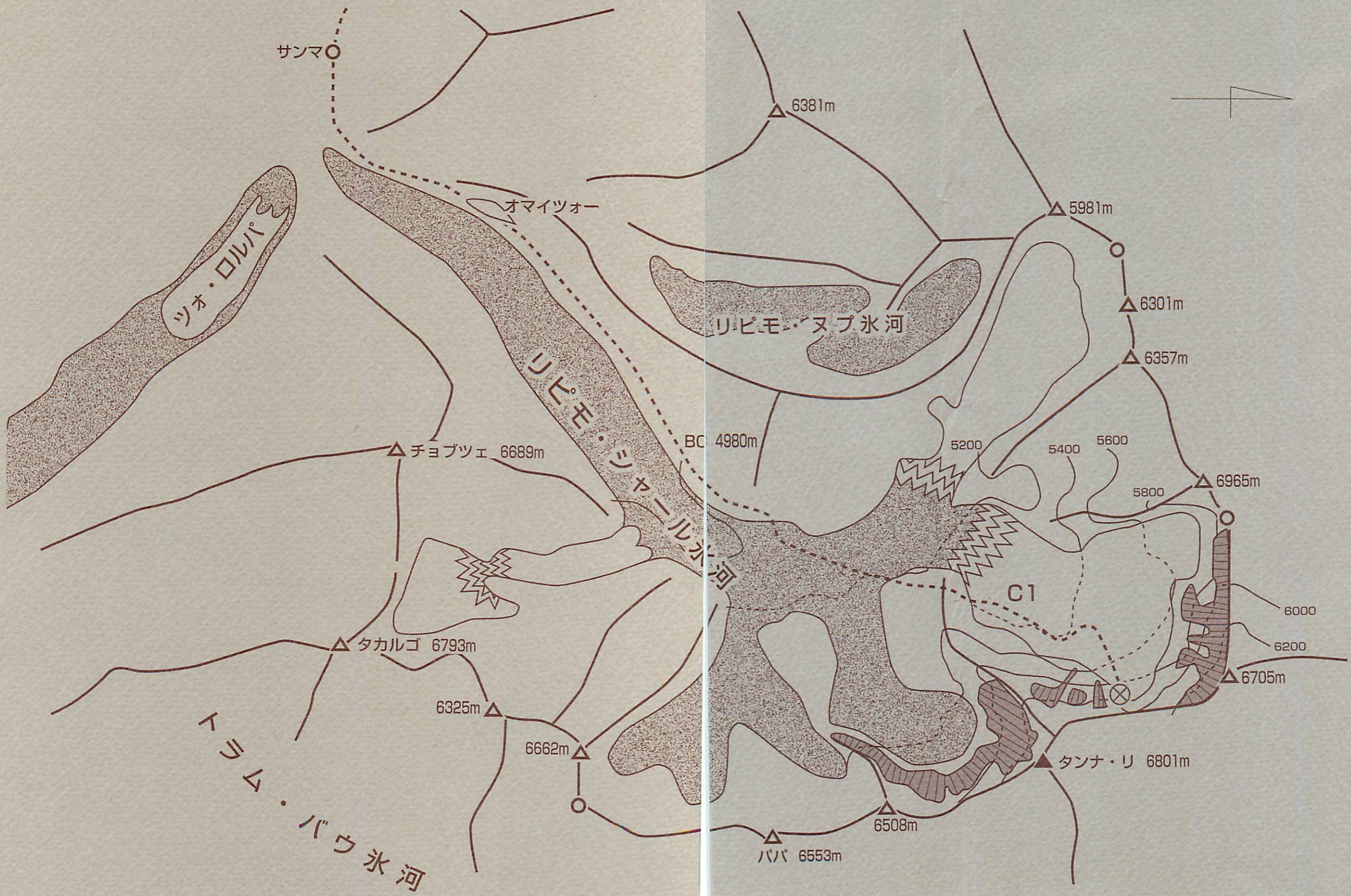
#### 9月

- 29日 出国

#### 10月

- 2日 カトマンドゥ→ドラカ
- 3日 ドラカ→シガティ
- 4日 シガティ→ジャガット
- 5日 ジャガット→シムガオン
- 6日 シムガオン→ドンガン
- 7日 ドンガン→ベディン
- 8日 ベディン→ナ・ガウン
- 9日 ナ・ガウン→オマイ・ツォー
- 10日 タンナ・リ B. C. 往復
- 11日 オマイ・ツォー→ナ・ガウン
- 12日 ナ・ガウンからヘリコプターでカトマンドゥへ
- 16日 帰国





サンマ○

ツォ・ロルパ

オマイツォー

△ 6381m

△ 5981m

△ 6301m

△ 6357m

リピモ・ヌブ氷河

リピモ・シャル氷河

BC 4980m

5200

5400

5600

5800

△ チョブツェ 6689m

△ 6965m

△ タカルゴ 6793m

6000

6200

△ 6705m

トラム・バウ氷河

△ 6325m

△ 6662m

△ タンナ・リ 6801m

△ 6508m

△ パパ 6553m